



人間は社会的動物か？

さいとう あきら
齋藤 晃

民博 先端人類科学研究部

人工的に整備された街並、そびえ立つキリスト教の聖堂。
かつて抵抗したはずの植民地政策の残像が、今もアメリカの先住民の暮らしを取りかこむ。
コロンブスの航海以降、先住民たちは西欧の人間観をどのように受けとめてきたのだろうか。
3年間にわたるあらたな研究プロジェクトがはじまった。

人間観の多様性

人間が人間である条件とは何だろうか。どのような条件を満たせば、人間は人間としてみとめられるのだろうか。人間とは潜在的な存在である。生物学的に人間であっても、それだけでは人間社会の仲間入りはできない。人間にふさわしい能力や資質を身につけなければ、真の人間とはみなされない。それでは、真の人間、人間らしい人間とは何か。おそらくこの問いには、時代や地域によってさまざまな答えがありうるだろう。この人間観の多様性は、人間の可塑性や創造性のあらわれなのだが、人間同士の対立の原因ともなりうる。

一五世紀末のコロンブスの航海以降、アメリカに渡ったスペイン人は、人間の条件について比較的均一で明確な考えをもっていた。たとえば、服を着ていることである。この点で、アメリカの住民の多くはおよそ人間的ではなかった。裸体をさらすことへの羞恥心の欠如は、アメリカが地上の楽園であり、その住民が原罪を免れていることとしるしと解釈されることもあったが、多くの場合、彼らが人間以下の存在、すなわち「野蛮人」であるあかしとみなされた。実際、先住民のもとに派遣されたキリスト教の宣教師が真っ先に取り組んだことのひとつは、綿花を栽培することである。



ヘルー山岳部の先住民の町。植民地時代の大農園主の領地に建設された(2010年撮影)

人間の条件としての社会性

ここで紹介する研究プロジェクトは、スペイン人がアメリカの住民に課した別の人間の条件、すなわち社会性に注目する。古代ギリシアの哲人アリストテレスは、人間は本性上、寄り集まって社会をつくらんと述べたが、この人間観は近世スペインでも大きな影響力をもっていた。当時の考えでは、社会をつくることは人間の生存にとって必要不可欠であり、それゆえ人間の本性にかなったことである。人間は生存に必要な装備や能力、知識を備えて生まれてくるわけではないので、助け合うことで生存のチャ

ンスを高める必要がある。人間はまた、無力な幼年時代が長く続くため、年長者が年少者を保護してやらねばならない。人間が社会的動物である所以である。

それでは、アメリカの住民はどうか。アステカやインカのような国家の存在にもかかわらず、アメリカに渡ったスペイン人は、先住民の社会性の欠如を強調している。いわく、先住民は数多くの小さな集落にわかれて暮らしている。それらの集落は互いに敵対しており、戦争が頻繁である。首長はいるが、強制力をもたず、各人が勝手気ままに振る舞っている。家族の絆はもろく、

妻は夫に、子どもは親に従わない。言語はいちじるしく多様で、意思疎通を妨げている、云々。要するに、アメリカの住民はいまだ社会をつくることをしらず、共同生活の利益を享受できないまま、野獣にも等しいみじめな生活を営んでいる、というわけである。

アメリカにおける集住政策

スペインによるアメリカの植民地化は、先住民をキリスト教徒にするに先立って、まず彼らを「人間にする」ことを目指していた。そのための方策が、このプロジェクトのテーマである集住政策である。これは、広い範囲に散らばって暮らす先住民を、計画的につくられた大きな町に強制移住させる政策であり、一六世紀以降、スペイン領アメリカ全土で実施された。町は碁盤目状に区画された人工的な空間であり、中央には広場が、その周囲にはキリスト教の聖堂や役場、学校などが立ち並んでいた。町に集められた先住民は、役人や司祭の監視下、秩序正しい社会生活を営み、人間にふさわしい礼節を身につけることを期待された。

集住政策の実施はアメリカの住民に多大な否定的影響をおよぼした。町への集住化は、多様な自然資源の利用を妨げ、伝染病の蔓延を助長し、社会組織をかき乱し、自然景観と一体化した在来宗教の実践を困難

にした。先住民は集住化に抵抗し、出身の集落に舞い戻ったり、都市や鉱山に逃亡したりした。そのため、町の人口は急速に減少し、危機感を覚えたスペイン人は、再集住化の命令を繰り返した。集住化の必要性が疑われることはなかったが、政策が期待された効果を上げていないことは、誰の目にも明らかだった。

しかしながら、今日の先住民の町を訪れると、植民地時代の集住政策のまぎれもない影響がみてとれる。直行する街路、方形の中央広場、そびえ立つキリスト教聖堂などである。この事実をどう解釈すべきだろうか。集住体制下、先住民はスペイン化を余儀なくされたのだろうか。それとも、集住政策が先住民により骨抜きにされ、彼らに好都合なかたちに変えられたのだろうか。社会的動物というスペイン人の人間観は、先住民によりどう受け止められ、どのような帰結を招いたのだろうか。

プロジェクトはまだ始まったばかりである。三年の研究期間を通じて、これらの問いへの答えを探っていきたい。



ボリビア低地の先住民の町。植民地時代には宣教師のつくった町だった Alcide d'Orbigny, Voyage dans l'Amérique méridionale, vol.8, P.Bertrand et V.Levrault,1845.

科学研究費補助金 基盤研究(Ⅱ)

「旧スペイン領南米における集住政策と先住民社会へのその影響の地域間比較」

2010年4月～2013年3月
代表者・齋藤 晃